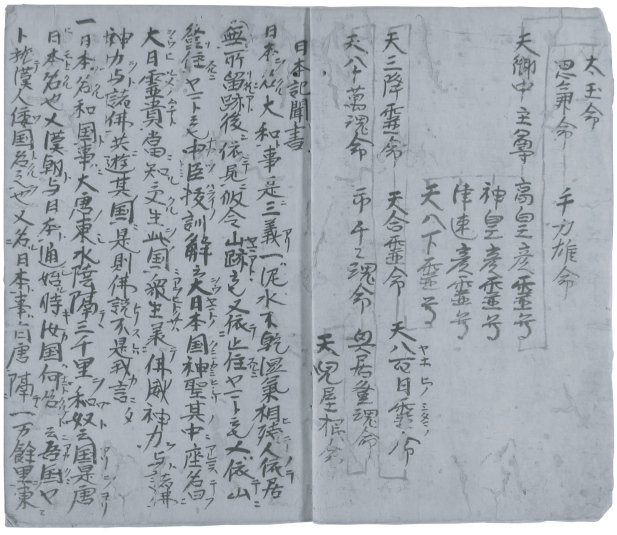

二　日本紀聞書　にほんぎききがき

図書館所蔵、貴重書一六八五号。写本一冊。仮結綴。共紙表紙。表紙左肩上に「和記聞書」と外題あり。左下に「東大寺戒壇院」の印記、右下方に「相傳奥旨也」とあり。縦二五・九糎、横一六・三糎。本文首葉および末葉に「日本記聞書」と記載。墨付三十六丁。表紙側副葉二葉に天神七代・地神五代の系図。二葉目表右下に表紙と同じ印あり。裏表紙および裏表紙側副葉二葉にも本文と同筆で神祇関係の記載がある。料紙は楮紙。

※　　※

本書には奥書がなく、本文にも成立年代を直接示す文言はない。しかしながら四丁裏に、「日本記ノ類ヒ多ク有之」として典籍が列挙される箇所があり、その最後は卜部家出身とされる慈遍の『神風和氣』（豊葦原神風和記）で締め括られ、彼の略歴が続いている。このことからすると、室町前期前後を成立上の画期と見ることができよう。なお、この書目の列挙部を含む聞書の一部は、渡辺匡一氏が紹介する、文安六年（一四四九）に比叡山西塔東谷現光院で書写された旨の奥書を持つ天理図書館所蔵（宝玲文庫旧蔵）『神皇正統記』付記聞書とほぼ一致するが、他の『日本紀聞書』との関係についてははっきりしない。

本文ではまず、「大和」「和」など日本の異名の由来を、「日本記ノ類ヒ」に挙げられる『中臣祓訓解』を引用しながら説明し、続く国常立尊と天御中主尊との関係を示す箇所から、神代巻上巻の解釈が項目立てられ施されている。この中で特徴的なのは、天地開闢の三国比較の箇所である。そこでは、鎌倉末期に成立した『鼻帰書』と同様、葦牙を独鈷に、他国の原初態様の形状を三鈷・五鈷に見立てた上で、飾りがない日本の姿を最も根本とする根本花実枝葉説（吉田神道を特徴付ける神道思想の一つ）を展開させている。

二十丁表からは下巻に関する記述となるが、その大部分は、二十二社を始めとした神社のいわば由緒書のような体裁となっており、中世神社と日本紀の関係の深さが窺える。

また、天平十四年（七四二）の東大寺建立に伴う橘諸兄参詣および行基の夢想に関する記事（この箇所は『大神宮諸雑事記』が引用されている）や、宇佐八幡神の東大寺入りのことが独立した一項を構成している。『日本書紀』本来の載録期間外の出来事でありながら、こうした東大寺と神祇の関係についての記事が充実していることも、本書の特色の一つに数えられよう。

（加瀬直弥）

【参考文献】
渡辺匡一「室町物語と日本紀」『国文学　解釈と鑑賞』六十四巻三号、平成十一年（一九九九）
なお、天理図書館本『神皇正統記』の典籍列記については伊藤聡氏も言及している。同「中世神話論」大久保良峻他編『日本仏教三十四の鍵』春秋社、平成十五年（二〇〇三）